



TITLE:

<批評・紹介> 梁上椿著「嚴窟藏鏡」

AUTHOR(S):

水野, 清一

CITATION:

水野, 清一. <批評・紹介> 梁上椿著「嚴窟藏鏡」. 東洋史研究 1942, 7(1): 54-55

ISSUE DATE:

1942-05-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/138812>

RIGHT:

嚴窟藏鏡

第一集、第二集 上中三冊

梁 上 椿 著

第一集民國二十九年十二月、第二

集上三十年一月・中同五月發行

定價 一・二上各貳拾元 二下貳

拾四元

支那においては、古鏡に關する著録は二三あるが、あまり系統的なものはない。研究もすゝんでゐない。それにひきかへわが國では非常に進歩してゐて、支那遺物研究中もつともよく整備されてゐる。こんど北京で出版された『嚴窟藏鏡』二卷三冊は、從來の日本の研究がよく參照され遺物も系統的に配列され

て、今までにみぬ進歩的な著述であるといふことができよう。

第一巻はいはゆる秦鏡にあてられ、第二巻上は前漢鏡、中は後漢鏡にあてられ、未刊の下は漢末魏晉の畫象鏡類にあてられてゐるらしい。著者の梁上椿氏はどういふ經歷の人か知らぬが序文によると鑛山關係の技師のやうである。もつばら鑛冶の學をおさめ、山野を跋涉し、エレベーターで地下に昇降して暮すること二十餘年、大自然の金石と共同生活し、おのづからこれに愛著の念をおこし、鑛物の標本類を蒐集したが、そのうち金石の學に興味をおぼえ、鏡鑑類を蒐集研究をするやうになつたといつてゐる。そして支那事變以來、事情によつて鑛山關係の業をはなれ、もつばら古鏡の系統的研究所を志すに至つたらしい。著者はおもに系統的研究を目標として蒐集したから、單に鑑賞の目的から買ひあさつたものとは、おのづから選を異にしてゐる。著録するところは一家の蒐藏録でありながら、非常によく組織だつて一個の研究をみるがごとき觀をあたへる。こゝに著者獨特の識見があるとおもふ。しかもこの研究はさうたうわが國の學者の研究を理解してゐるため、はなはだ進歩的で、そして一々首肯できることが多い。

また、著者はもとより金石學に根柢をもたず、銘文の讀法にはかならずしも自信がないといつてゐるが、これをそのまゝうけとつても、かへつて從來の考古的、玩弄の弊風にとらはれる

ことなく、自由な觀點から鏡鑑の形式的研究に突入して行つた態度をよくしめしてゐる。著者の態度は系統的研究、そして鏡鑑の形式論に終止してゐる。それ以上にでない。しかし、形式論に安心し、徹底してゐる點はかへつて純一でよい。しかもそれがかなり徹底的におこなはれてゐる上においては何よりである。考古學はとにかく、この形式論を根柢にもたねばならない。これがなければ考古學といふものはない。それにこの書のもつ圖録といふ性質上、この形式論に徹底したことは賢明であるといはなければならない。これで、われわれがかへつて氣づかなかつた點を、實物で指示してゐる結果になつてゐるのはおもしろい。たとへば、粗末な渦文鏡類（八三—九一）を細文地渦文鏡（四八—八二）のあとにならべたときもろもろの連弧文鏡（六七—八四）を連弧文精白鏡（四四—六四）のあとにおいたときは、おのづからその系統をあらはして充分である。これらは一見みやすきことのやうであるが、とにかくいままでに人のあまり注意しなかつたところである。

圖録としても、いばゆる優品、珍品にはいさゝか缺けるところがあり、さういふ點では梅原末治博士の『漢以前の古鏡』に載録された秦鏡にははるかにおよびないが、研究的にはいろいろと興味あるものをふくんでゐる。とにかく研究的な蒐集品といふ點からはわが國の守屋孝藏氏の蒐集に肉迫するものであ

る。蒐藏は普通品を主とするも、それはそれだけ代表的といふべく、かへつて鏡鑑通志としては、それだけ價值があるといふものである。

たゞ、末尾にのせた「北魏神龜八乳四神禽獸帶鏡」は北魏のものでない。實物をみないとなほ斷定はできぬが、鈕座のわきにある「神龜」の二字は決して年號ではない。もし年號であれば、神龜何年とあるべく、また外の銘帶の字と一致せぬもの不思議である。要するに圓鈕の下に座のごとく、あさく彫りだされた龜形に「神龜」の傍書をしたとみるべく、この例は後漢の獸帶鏡、畫象鏡に間々ある。たゞその曲線的な花文字樣が注意をひくにたる。内區は細線式獸帶鏡で、後漢、特に後漢初の形式とみて不可ない。外の銘帶はいはゆる前漢式の角ばつた異體字である。そして重厚な平縁ではつてゐること、正しく前漢式鏡ともいふべく、これらを綜合して前漢末、後漢初の古鏡の一形式とみるべきとおもふ、北魏の鏡鑑といふことはいかなる點よりも肯定できない。

しかし、そんなことはとにかくとして、本書三冊はかの地にまねな系統的形式觀をしめす標準的古鏡圖録として充分推賞に價するといふ。をはりに著者の健在にして、第二集下以下もひきつゞき出刊されんことをいのるものである。（水野清一）